

論文 / 著書情報
Article / Book Information

論題(和文)	知財見聞録 歴史と近代化が美しく共存する国、モロッコのリーダーシップ
Title(English)	
著者(和文)	田中義敏
Authors(English)	Yoshitoshi Tanaka
出典(和文)	発明, Vol. 112, No. 9, pp. 34-35
Citation(English)	THE INVENTION, Vol. 112, No. 9, pp. 34-35
発行日 / Pub. date	2015, 9



知財見聞録

歴史と近代化が美しく共存する国、モロッコのリーダーシップ

東京工業大学 イノベーションマネジメント研究科 教授 田中 義敏

清潔感あふれる国

本年4月、北アフリカの最西端にあるモロッコ王国を初めて訪れてきた。今回のモロッコ訪問は国際機関からの特命業務であったため、訪問の目的や業務内容について、直接的に記述することはできない。

したがって、この機会に筆者が発見した見聞録にとどまることをあらかじめ了承いただきたい。

パリ経由でカサブランカのムハンマド5世国際空港に到着。自宅を出てから約24時間という長旅だった。

空港には、モロッコ産業財産権・事務局(OMPIC)の技術イノベーション担当であるNour-Eddine BOUKHAROUAA氏が迎えに来てくれた。今回の全日程に同行してくれた方である。

空港から市内へと車で移動したが、高速道路の両脇には太陽電池パネルが設置された照明柱が美しく並んでおり、「実にスッキリして整然とインフラが整備された清潔感あふれる国」という印象を持った。

モロッコ王国は、日本とほぼ同じくらいの国土面積で人口が約3200万人。同国には、先住民のベルベル人が約30%、アラブ人が約65%暮らしているといわれている。Nour-Eddine氏の母はベルベル人、父がアラブ人とのこと。モロッコでは、先住民と7世紀ごろに移住してきたアラブ人が既に同化しているという。

アラブ人が多数を占める今日においても、先住民族であるベルベル人の存在感は大きい。これは、他の北アフリカ諸国とは若干異なり、モロッコの特徴の一つでもあるようだ。

モロッコの知財事情

同国の知的財産権に関する事情についても少々触れておきたい。2014年における特許出願件数は1096件、そのうちモロッコ在住からの出願が353件、モロッコ発のPCT出願は59件である。国内からの出願が約30%というのは、発展途上国の平均をかなり上回る割合である。

商標出願については、全体で1万1709件であるが、そのうち国内からの出願は6166件である。また、意匠出願については、全体で1167件であるのに対し、国内からは731件の出願がなされており、産業財産権全体として国内からの出願が増えていることが同国の知財事情として挙げられる。

OMPICは、近年のこうした傾向について、「国内産業の転換点」と評価している。

また、OMPICでは特許の質の向上、モロッコ・ブランドの出現の促進などにも積極的に取り組んでおり、さらには、アラブの特許情報発信プラットフォーム「Arabpat」の公式発表等、アラブ、北アフリカ地域でのリーダーとして活躍している様子がうかがえる。

国内投資を支えるリン鉱石産業

一方で、東にアルジェリア、南に西サハラ、北にスペイン、西は大西洋、北は地中海に面しているモロッコは、隣国との問題も少なからず抱えているようである。Nour-Eddine氏は、「我々が親しい隣国は、大西洋と地中海だけ」と、冗談交じりに近隣諸国との複雑な関係を表現する。

モロッコをはじめとする北アフリカの国々は、地中海世界とアラブ世界の一員であり、アフリカ大陸といっても中央アフリカ以南とは全く異なる文化と歴史を持っている。今後はアフリカへの経済支援や教育支援にも力を入れていくとのことだ。そんな話を聞いていると、北アフリカはアフリカではないような錯覚に陥ってしまう。

モロッコは石油資源を持たないが、埋蔵量世界1位のリン鉱石を中心とする鉱業が国内での投資を支えている。リン鉱石の産出、輸出企業であるリン鉱石公社が、教育をはじめ、さまざまな分野で多額の投資をして国づくりの大きな力になっているとのこと。

セタットにあるHassan 1 Universityでのインキュベーションセンターの建設、ラバットの研究機関であるMASCIR (Moroccan Foundation for Advanced Science, Innovation and Research) における研究開発への支援などがその例である。いずれも、かなり大規模な経済支援を推進している。

ラブロマンス Rick's Café

モロッコの首都はラバット、政治・行政の中心である。そして、カサブランカは、モロッコ最大の経済都市であり、アフリカ有数の国際都市でもある。

首都ラバットには超近代的な路面電車が走っていた。他国のものとは比べ物にならないほどの美しさである。

そして、近代的な路面電車とは対照的な歴史遺跡が大切に保存されている。モロッコを独立に導いたムハンマド5世の霊廟や王宮も美しかった。

カサブランカには有名なレストランがある。ディナーを済ませた後であったが、せっかくの機会なので連れていってもらった。「Rick's Café」である。

店内は、フランス領モロッコのコロニアル様式の内装、アンティークの調度品などで飾られ、ほとんど満席の状態で賑わっていた。

筆者はてっきり映画『カサブランカ』の撮影に使われた場所かと思っていたが、映画に登場する酒場、「カフェ・アメリカン」を模してRick's Caféが造られたとのこと。

映画の舞台となったのは、第二次世界大戦中の欧州とモロッコのカサブランカ。当時、欧州から米国に亡命する寄港地がフランス領モロッコのカサブランカであった。酒場を経営していたリック（ハンフリー・ボガード）と理由を告げずに去っていったかつての恋人イルザ（イングリッド・バーグマン）が、カフェ・アメリカンで偶然の再会を果たすというラブロマンスである。

結局、筆者はRick's CaféのBarコーナーでウイスキーを一杯飲んで、映画の雰囲気味わってきた。残念ながら、イルザに相当する女性は隣の席にはいなかった。

絶大なる存在感

モロッコ最大のハッサン2世モスクがカサブランカの海岸にそびえ立っている。モロッコで最大、世界で3番目に大きいモスクといわれ、海岸線から飛び出るように建てられている。

対岸のスペインの船舶から見ると、異様なまでの威厳を誇示しており、敵を寄せ付けないという意味が込められていると聞いた。

午前・午後とスケジュールがビッシリの1週間の滞在であったが、昼食時と夜間に幾つかの文化視察ができた。

今回は、カサブランカ、ラバット、セタットの3都市だけで、多くの観光客が訪問するマラケシュに足を伸ばす機会はなかったが、またいつか訪問したい国である。



Hassan 1 University (UH1)、写真一番左が、OMPICのNour-Eddine BOUKHAROUAA氏



ラバットの王宮の入り口で



モロッコの国王であったムハンマド5世の霊廟



Rick's Caféでしばしロマンスに浸る



モロッコ最大のハッサン2世モスク



OMPICのメンバーとオフィス内で記念撮影